



## 熊本インターナショナルスクール 開校記念シンポジウム

### 『グローバル教育の意義を考える』

去る7月22日(日)、ホテルメルパルク熊本にて、熊本インターナショナルスクール主催の開校記念シンポジウムが開催された。これから一層急速に進むビジネスのグローバル化と、それに伴う日本の学校教育の変化を背景として、21世紀に世界で活躍する人材を輩出するにはどのような教育が必要となるのか。熊本インターナ

ショナルスクールが目指す「グローバル教育」の意義を、日本の学校教育の専門家や海外でビジネスの第一線で活躍するパネリストとともに議論した。

#### 基調講演：21世紀に世界で活躍する人材を熊本から輩出する ～従来の学校教育とこれから～

講師：福本 眞也 氏 (上益城郡益城町出身)

従来の日本の学校教育を受けてきた(本日も来場の、主に小学校低学年・未就学児の親世代の)皆さん、ご自身の学校の勉強で「何でこんなことをやらなければならないのか?」と思ったことはあったでしょう。少子高齢化が進む日本において、子どもたちはこれからどうやって生きていくのか? グローバル化する世界の中で、日本が置かれている状況はあやういと思わないか? 実は、こうした問題意識を背景に、日本の学校教育にも変化が訪れている。

2020年、東京オリンピック前後に待ち受ける教育の四大変化として、(1) 小学校で「英語」が成績のつく科目となる、(2) 「アクティブ・ラーニング」がキーワードになる(「活躍力」を身につけるための「自立と体験」)、(3) プログラミングも必修科目になる、(4) センター試験が廃止され新試験になる、ことが挙げられる。この四大変化のために押さえておきたいポイントとしては、英語力とアクティブ・ラーニング力を身につけること。英語は早くから慣れさせて、英語の環境で(インターナショナルスクールやサタデースクールなど)算数・理科などを学ぶ環境を作ると良い。

21世紀のグローバル社会での「活躍力」とは、世界を見て多様性を受け入れる視野・視点、リーダーシップ、コミュニケーション能力と、精神力・体力・柔軟性といった「生きる力」が加わった総合的なもの。世界が豊かなのは生物のみならず文化の多様性があるからだが、異なる文化が平和裏に共存できることが必要であり、その基礎には人と人との関係がある。日本人の伝統的な価値観に素晴らしいところはたくさんあるが、グローバル化が進む中、新たな日本人像が必要。日本文化の中にあっては、謙譲の美德などを保持する一方で、異文化との接触においては、「外国語を使いこなす」「論理的に自己主張」できる二つの顔を持った日本人の育成が必要。この二者に優劣はないが、日本の将来は21世紀にこの両方の素質を持った人材を何人生むことが出来るかにかかっている。これからの教育に求められることには、リーダーのための組織的教育、リアルな世界との接点、小さいころ(10歳前後)からの自ら判断・選択させる経験があげられる。

熊本インターナショナルスクールが掲げる理念は、21世紀に求められる能力を育む術が詰まっている。メリット、デメリットは種々あるが、子供の教育の選択肢の一つとすることは、「Wonderful Challenge」と言っている。

日本には、「欧米的な近代的生活：大都市の顔」、「洗練された伝統的文化：京都・奈良の顔」、「非洗練の伝統的生活：田舎の顔」の三つの顔があるといわれる。熊本県出身者はこの三者の違いを理解しうる環境にあり、この日本文化の良さを基礎として、欧米人の合理性、中国人の自己主張と、日本人の価値観(気配り、人間関係本位主義、寛容、自然との共生)を自在に使い分けられる人になってもらいたい。21世紀に熊本県出身の皆さんが、世界で活躍することを期待している。



## パネルディスカッション

### 『グローバル教育と子供の未来』

～世界に羽ばたくって、実際、どんなこと？考える力を身に付けるとどんな未来が待っている？～

— 幼少期の早い段階から海外を目指すということについてどう思うか。日本語教育からまとまった期間離れることへの不安もあると思うが。

**福本氏** 今の中高生は、早く外に出したほうがたくさん学ぼうとする。3-4週間の海外研修、海外への修学旅行や短期留学など。海外といろいろな接触の機会を作ることによって、高校を出てそのまま海外に直接進学するきっかけになることもある。従来は15歳になったら高校受験、18歳で大学受験と、決まった年になったら受験をして、とにかく行けるところへ行くというものだった。一方で、イギリスにはギャップ・イヤーの制度があり、例えば高校卒業から大学入学までの間をあえて長く取ることで、学校では得られない経験や勉強をすることができる。今までのように決まった形に合わせなくてよいのではないかな。

#### パネリスト

- 福本 眞也 氏  
学校法人明星学苑 明星中学高等学校 副校長
- 今崎 憲児 氏  
米国シアトル在住 大手 IT 企業エンジニア
- マシュー・オーム 氏  
熊本インターナショナルスクール校長

#### モデレーター

- 杉山 浩司 氏  
米国ニューヨーク州弁護士

— 熊本インターナショナルスクール開校の経緯の説明と、1学期の報告を。

**オーム氏** 小学部を作りたいという（幼児部であるピカソインターナショナルスクールの）保護者の声に後押しされた。世界が変わってきており、英語だけではなく、考える力がこれから生き抜くのに必須。英語が特殊技能となるのは日本だけであり、英語は当然必要になるもの。熊本にこれまでにないものを作る新たな試みであるためチャレンジも多いが、各方面に相談しながら進めてきており、信頼を得られつつある手ごたえもある。

（KISの授業風景をビデオで紹介しながら）本校では新しい教育のアプローチを用いている。答えが一つではないことを前提にしたアクティブ・ラーニング、児童一人ひとりのレベルに合わせた課題の提示や指導を通して、児童に自ら考える力を身に付けさせる。授業には電子黒板を使い、生徒には端末を一台ずつ持たせ、家庭での宿題や勉強に用いている。端末には、29のレベルに分けられた2,500冊以上の英語の本が収録されている。児童は1学期だけでもすでに100冊以上は読んでいる。

**今崎氏** 先日、KISを見学させてもらったが、私の娘が通うシアトルの私立小学校とやっていることは全く同じ。うるさいくらいに子供たちが活発に授業に参加して、また楽しんでいる。ゲーム感覚で楽しく学び、アクティブ・ラーニングを取り入れて子どもたちのやる気を引き出す、動機付けが大切。

— 福本先生に KIS の様子をご覧になっての日本の教育の専門家としてのコメントをお願いしたい。

**福本氏** うらやましいなあと思う。我々の時代にこのような教育はなかった。日本は英語教育の改革を進めようとしているが、方向性ができるまで10年、根付くまでに20年かかるのが教育界の実情。18年前、英語のスピーキングやリスニングはそこまで重要ではないといていた。ただ、徐々に改革の動きがあることには間違いない。実際に、日本の大学で英語に舵を



切ったところ、全ての授業を英語でやるような大学も出てきている。ただ、今、ここで議論しているようなレベルに達するにはあと 20 年くらいかかるだろう。KIS でやっているような、システムティックに、子供の発達段階に併せて課題を与えるというようなものが今後、出てこなければいけない。欧米では当たり前になってきている。

**オーム氏** 日本における英語のバロメーターは低い。英語は大学に入るためではなく、コミュニケーションを取るためのものなのに、話すことと聞くことは重要視されてこなかった。これを変えていかないといけない。日本の教育は、英語以外はトップレベルであるのに、それを生かしきれずもったいない。

**福本氏** 元教員として申し上げますと、以前は英語を英語という教科の中で評価してきたが、ここ 2、30 年、物を考える、情報を収集し発信する、コミュニケーションのツールとして見るようになってきた。英語を使って何をするの？というところに収斂してくる。これからは、例えば海外や外資系で転職するときに、これまでの経歴を説明して、自分を雇ったら得ですよ、ということを英語で説得しなければならない。



— ビジネスの文脈でグローバル人材が必要とよく言われるが、それはなぜなのか。グローバルで活躍するとは。また、どのようなスキルがあればグローバルで活躍できるのか。

**福本氏** 社会そのものがグローバル化してきている、不確定な時代。20 年たてば 65%の仕事は現時点では存在しない新しい職種となり、現存する職の半分は消えてなくなるであろうと言われている。日本人だけでできるような仕事もないだろう。例えば、東京のある中学校の生徒の 2 割は、国際結婚した家庭に生まれた子供たちであり、世界を認識する中で、グローバル化というのは、そのように当たり前にあるもの。世界を認識し、多種多様な人と関わり、コミュニケーションができる能力が必要になる。

**今崎氏** ダイバーシティ（多様性）というのが非常に大切。いろんな国の人と一緒に働く中で、プロジェクトを引っ張っていくというのは大変なことであるが、それがこれからのビジネスでは必須。プロジェクトを文書にして、フィードバックをもらって、実行に移して、検証を行うという一連の流れ。グローバルで活躍するというのは、そうしたダイバーシティの中で、プロジェクトを最初から最後までやり通すということ。KIS での教科をまたいだ学習もそうだと思うが、プロジェクトをやり遂げる力を育むことが、世界で仕事をしていくうえでとても大事。

— 東京のみならず熊本でもグローバル化への対応は必要なのか？

**福本氏** AI が台頭する現代の情報化社会、距離の壁は取り払われていくので、グローバル化への対応が必要なのが東京に限られるということはない。オーム氏のような人が熊本に根付いて、グローバル人材を育てる種がまかれていく。今後、熊本が元気を持っていけるか、そのあたりがカギでないか。

**今崎氏** 熊本は何と言っても阿蘇と天草があり、自然が素晴らしい。シアトルも日本でいう富士山のようなマウントレニアがあり、環境がいい。仕事を行う上で、物理的な距離はどんどんなくなっていくので、むしろ環境が良いところにいい人材が集まるようになる。自然環境が良いのは、今後のビジネス環境としても、熊本の強みと言っていい。